

夏目漱石の世界  
（両親と私）

はじめに

さて、今回は、夏目漱石の世界『こころ』という作品の中の『両親と私』という第二部の「内容」であるが、それは、まず、「私」という人は、東京の帝国大学を無事に卒業をしたので、七月、汽車で故郷へと帰ることになる。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになっていいる。

まず、宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。そこで、母に「父親」の様子を聞くと、「もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。しかし、この「慢性腎臓病」の恐ろしさは、「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること」である。

さて、両親は、息子の「卒業祝い」の相談を始めるが、「私」という人は、それには反対で、「あんまり仰山な事は止してください」と言うと、母親は、「仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。そう遠慮をお為でない」と言い、また、父親も、「呼ばなくとも好いが、呼ばないとまた何とか言うから」、「東京と違って田舎は蒼蠅からね」と、こうも言うのであった。その結果、「卒業祝い」の日取りは決まるが、その日取りが来る前に、新聞による明治天皇の御病気の報知を受けて、「まあ、（今回は）ご遠慮申した方がよからう」と取りやめになるのであった。

やがて、明治天皇の「崩御」とともに、父親の病状も悪化し、母親は、（夫を少しでも元気づけさせようと）、息子に「先生に就職口を頼んだら」と言うので、「私」という人は、先生に条件の好い「就職口をお願い」の手紙を出す。先生からの返事はいつまで経っても来ない。そこで、九月初め、東京へ出ようと決めるが、その出発日の二日前の夕方に、父親が風呂場で突然に倒れる。しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事態となり、そこで最初は兄や妹に父の現状を知らせる長い手紙を出す。やがて急を知らせる電報を兄や妹に急遽打つこととなり、やがて、兄と妊婦の妹代わりの夫が急ぎ駆けつけることになる。そして、天皇の「崩御」から約一ヶ月半後の明治天皇の「御大葬の夜」に「乃木大将の殉死」という大きな出来事が起こるのである。

もちろん、東京にいた先生も、当然のことながら、この「乃木大将の殉死」を、正にその夜の号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことになって、先生は、ある「決心」をして、その日（午前中）に、「私」に「……ちよつと会いたい。が来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」（実家）へと届くのである。ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に（東京へは）「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、今度は「……来ないでもよろしい」という「電報」（急報）を打って来るのである。

やがて、父親の病気は最後の「一撃」を待つ間際まで進んで来て、家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入る、そのような状態が続くなかで、「私」という人は、看護婦を相手に、父の水枕を取り替え、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せていると、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を私の手に渡した。その先生から

の「分厚い郵便物」を看護の合間合間を見ては、自分の部屋でただ最初から最後までさつと頁を急ぎ開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一旬が眼に入り、それは、「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というこの言葉に衝撃を受けて、夢中で医者の家へ馳け込み、父はあど何日保つのか聞こうとするが、医者は生憎留守で、そこですぐ俵を停車場へ急がせ、その停車場で紙切れに母や兄宛ての簡単な手紙を書き、それを急ぎ宅へ届けるよう車夫に頼むとともに、思い切った勢いで東京行き汽車に飛び乗り、ごうごう鳴る三等列車の中で、先生の手紙を漸く最初から最後まで読むという内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和四年十二月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

二二二

序 はじめに

中、 両親と私

- 一、 冒頭の文章（父親の想い）
- 二、 母親に父の病状を尋ねる（前）
- 二、 父親にその病状を直接聞く（後）
- 三、 赤い飯を炊いて客を呼ぶ相談（前）
- 三、 日取り決めるも天皇の御病気の報知（後）
- 四、 友達や先生に葉書や手紙を書く（前）
- 四、 陛下の御病気と父親の病状（後）
- \* \* \*
- 五、 父親の元気が衰えて行く（前）
- 五、 天皇の崩御と父親の病状の悪化（後）
- 六、 「私」の就職口の問題について（前）
- 六、 母は就職口を先生に頼んだらと（後）
- 七、 先生に就職口のお願いの手紙を出す（前）
- 七、 先生からの返事を待つも来なかった（後）
- \* \* \*
- 八、 九月初め、東京へ出ようと考えた（前）
- 八、 蟬の鳴き声に人の運命の変化も感じ（後）
- 九、 父親が風呂場で突然に倒れる（前）
- 九、 三四日後、再び風呂場で倒れる（後）
- 十、 兄や妹に長い手紙を出す（前）
- 十、 兄や妹に急遽電報を打つ（後）
- \* \* \*
- 十一、 母は先生への手紙をもう一度と（前）
- 十一、 先生への手紙は結局出さなかった（後）
- 十二、 兄や妹の夫が急ぎ駆けつける（前）
- 十二、 先生から最初の電報を受け取る（後）
- 十三、 先生から二度目の電報が来る（前）
- 十三、 作さんという人が見舞いに来る（後）
- \* \* \*
- 十四、 最期の一撃を待つ間際まで（前）
- 十四、 兄と床を並べて寝る私（後）
- 十五、 先生先生とは一体誰の事だ（前）

十五、父の死後、母親を誰が見るのか（後）  
十六、父は時々譚言うわごとを言うようになる（前）  
十六、先生から分厚い郵便物が届く（後）

\*

十七、父親は危険な状態へと陥る（前）  
十七、手紙の冒頭部分を読むと（後）

十八、この手紙があなたの手に落ちる頃には（前）  
十八、慌あわてて三等列車に乗り込む（後）

\*

\*

※ 中 両親と私（概略）

※ 参考文献

中(両親と私)

うさぎ

さて、今度の『両親と私』という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（「半襟や鞆」など）と「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになっている。

## 一、冒頭の文章

宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」と言うのであった。

父は庭へ出て何かしていたところであった。古い麦藁帽の後へ、日除のために括り付けた薄汚ないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻って行った。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。「……卒業が出来てまあ結構だ」と、父はこの言葉を何遍も繰り返した。——私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあった晩先生の家の食卓で、「御目出とう」と言われた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝ってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それ程にもないものを珍しそうに嬉しがる父よりも、却って高尚に見えた。私は仕舞いに父の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出した。そこで、「……大学ぐらい卒業したって、それ程結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」と、私はついにこんな口の利きようをした。すると父が変な顔をした。「……何も卒業したから結構とばかり言うんじゃない。そりや卒業は結構に違いなが、おれの言うのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解つていてくれさえすれば、……」と言うのであった。

私は父からその後を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこう言った。「……つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。（本文）

\*

\*

まず、冒頭で、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変わっていない事であった」とあるが、これは、まさに「一安心」ということであり、父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「……卒業が出来てまあ結構だった」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」(本当の「意味合い」)は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういふ仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解つたかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

\*

\*

さて、本文に戻つて、「……私は一言もなかった。詫まる以上に恐縮して俯向いていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思ひ定めていたと見える。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚ものであった。私は靴の中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに押し潰されて、元の形を失っていた。父はそれを鄭重に伸した。「……こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」、「……中に心でも入れると好かつたのに」と母も傍から注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起つて床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置いた。何時もの私ならすぐ何とかという筈であったが、その時の私はまるで平生と違つていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかつた。私はだまつて父の為すがままに任せておいた。一旦癖のついた鳥の子紙(上質の和紙)の証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢いを得て倒れようとした。(本文)

\*

\*

これは、両親にとつて、長い歳月をかけて、大変な「思いや苦勞」などをしながら育て上げてきたわが子が、めでたくも東京の「帝国大学」(今の東大)を無事に卒業出来たというところで、わが子の将来も「前途洋々」であり、まさに感無量の思ひになっているのであり、(そこが「他人の先生」とは全く違ふところである)。そして、その「証拠」(明かし)としての「卒業証書」に対する両親の「考え方や価値観」と、卒業などは当り前で、ましてやその「証書」などにどれほどの「意味や価値」があるのかと軽く見ていたまだ若い「私」という人の「考え方や価値観」とは全く違つていたということである。

## 二、母親に父の病状を尋ねる(前)



私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出た  
り何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだよ。大方好  
くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住  
んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であった。それにしても  
この前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうち  
で独り異なる感じを抱いた。「……でも医者はある時到底むずかしいって宣告したじゃあり  
ませんか」と言うと、「……だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。あ  
れほどお医者が手重く言ったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さん  
も始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思っただがね。それ、あの気  
性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、なかな  
か私の言う事なんか、聞きそうにもなさらないからね」と言うのであった。

私はこの前帰った時、無理に床を上げさして、髭を剃った父の様子と態度を思い出し  
た。「……もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」と言ったその  
時の言葉を考えてみると、満更母ばかり責める気にもなれなかった。「……しかし傍でも  
少しは注意しなくっちゃ」と言おうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかつ  
た。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかし  
その大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかった。母は別に感動した様子も  
見せなかった。ただ「……へえ、やっぱり同じ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡  
くなりかえ、その方は」などと聞いた。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、「……私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた」とある。これ  
は、余りにも当然のことであり、この「私」という人が、今、何よりも知りたく心から心  
配していることは、まさに「……父親の病状が一体どうなっているのか？」ということであ  
り、そこで、「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれで  
いいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」  
と、母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、  
母はこういう事に掛けてはまるで無知識であったとある。これは、この「病氣」(腎臓病)  
がいかに「恐ろしいものか」(それは「本人の自覚のないまま病状はほとんど悪化してい  
く病であること」)を知らないということである。

一方、「私」という人は、「……でも医者はあの時到底むずかしいって宣告したじゃあ  
りませんか」と言うと、「……だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。  
あれ程お医者の手重く言ったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さん  
も始めのうちは心配して、なるべく動かさないようにと思っただがね。それ、あの気  
性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら(つまり  
『自覚、症状があまりない』)ので、なかなか私の言う事なんか、聞きそうにもなさらない  
んだからね」と言うのであった。

そこで、私はこの前帰った時、無理に床を上げさして、髭を剃った父の様子と態度を  
思い出した。「……もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」と言  
ったその時の言葉を考えてみると、満更母ばかり責める気にもなれなかったとある。これ  
は、「見た目」には、父親はいかにも「元気そうに見えた」からであり、それゆえ、「……

：しかし傍でも少しは注意しなくっちゃ」と言おうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかったとなるのである。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。(それはこの「病の特徴」を説明したのである)。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかったとある。

つまり、先生は、「……そんなに容易く考えられる病気じゃありませんよ。尿毒症が出る時、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。

この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたのである。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によって、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廃物が血中にたまることの原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なっているのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになる時、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。

しかし、「……母は別に感動した様子も見せなかつた」とあり、ただ「……へえ、やっぱり同なじ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」などと聞いたということである。

## 二、父親にその病状を直接聞く(後)

さて、私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かつた。父は私の注意を母よりは真面目に聞いてくれた。「……尤もだ。お前の言う通りだ。けれども、己の身体は必竟己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」と言うのであつた。それを聞いた母は苦笑した。「……それご覧」と言った。「……でも、あれでお父さんは自分でちやんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰つたのを大変喜んでるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業は出来まいと思つたのが、達者なうちに免状を持つて来たから、それが嬉しいんだつて、お父さんは自分でそう言っていましたぜ」と言うつと、

母親は、「……そりや、お前、口でこそそうお言いだけれどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思つてお出なのだよ」、「……そうでしようか」と言うつと、「……まだまだ十年も二十年も生きる気でお出なのだよ。尤も時々はわたしにも心細いような事をお言いだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家にいる気かなんて」と言うのだと言う。

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。この家から父一人を引き去つた後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と言うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰うものは、分けて貰つておけつという注意を、偶然思い出した。

母親は、「……なにね、自分で死ぬ死ぬつて言う人に死んだ試しはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて言いながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙つてる丈夫の人の方が剣呑さ(危険さ)」と言うのであつた。私は

理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐ちんぷなような母の言葉を黙然もくねんと（黙って）聞いていた。（本文）

\*

\*

さて、「……私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった」とある。そして、父は私の注意を母よりは真面目まじめに聞いてくれた。「……尤もともだ。お前の言う通りだ。けれども、己おれの身体からだは必竟ひつきよう己おれの身体からだで、その己おれの身体からだについての養生法ようじようは、多年の経験上、己おれが一番能く心得ているはずだからね」と言うのであった。これは、まさに「その通り」ではあるが、しかし、父親は、母親と同じように、この「病氣」（腎臓病）（腎臓病）というものがいかに「恐ろしいものか」（それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病やまいであること」）を知らないでいるのである。

父親の言葉ことばを聞いた母親は、苦笑をして、「……それご覧な」と言うが、「私」という人は、「……でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟かくごだけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業は出来まいと思つたのが、達者たつしやなうちに免状めんじやうを持つて来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそう言っていましたぜ」と言うのと、

母親は、「……そりや、お前、口でこそそうお言いだけれどもね。お腹なかのなかではまだ大丈夫だと思つてお出いでなのだよ」、「……そうでしょうか」と言うのと、「……まだまだ十年も二十年も生きる気でお出いでなのだよ。尤もとも時々はわたしにも心細いような事をお言いだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家うちにいる気かなんて」と言うのだと言う。——つまり、母親は、すっかり「樂觀的」になっているが、一方、父親は、むしろ「樂觀らくげんと不安ふあん」とか複雑くわんざんに入り交じつた「心的状態」になっているのである。

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家いなかやを想像して見た。この家いえから父一人を引き去つた後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と言うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫たふさでいるうちに、分けて貰もらうものは、分けて貰もらつておけという注意を、偶然思ひ出したとある。——これは、父親が死んだ後あと、家族は、一体、どうなるのだろうか？ 遺産相続問題を初めとして、実に様々な問題が発生することになるが、しかし、今は、そういう問題はあまり考えたくないという心状こころざしでもあるのだろうか。

また、母親は、「……なにね、自分で死ぬ死ぬつていう人に死んだ試たましはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて言いながら、これから先まだ何年生きなさる分かるまいよ。それよりか黙つてる丈夫の人の方が剣呑けんおんさ（危険さ）」と言う。これはもちろん、何ら「科学的根拠」も何もないものだが、ただ今は、「夫の病状悪化や死」というものは出来るだけ考えたくないという「心理」でもあり、それゆえ、「樂觀的な発言」が多くなるが、しかし、一方では、若しも「夫の病状が悪化したら」という、一抹いちまつの「不安」も決して消し去ることはでき得ないのである。

### 三、赤い飯めしを炊たいて客を呼ぶ相談（前）

私のために赤い飯を炊いて客をするという相談が父と母の間に起った。私は帰った当日から、或はこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断つた。「……あんまり仰山な事は止してください」と。……

私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いと言つた風の人ばかり揃つていた。私は子供の時から彼らの席に侍するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛は一層甚しいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙な人を集めて騒ぐのは止せとも言いかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

すると、「……仰山仰山とお言のだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当り前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うのである。母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰つたと同じ程度に、重く見ているらしかつた。「……呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とか言うから」と、これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分の予期通りにならないと、すぐ何とか言いたがる人々であつた。「……東京と違つて田舎は蒼蠅からね」と、父はこうも言つた。「……お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我を張る訳にも行かなかつた。どうでも二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。「……つまり私のためなら、止して下さいと言っただけなんです。陰で何か言われるのが厭だからというご主意なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強い主張したつて仕方がありません」と言うのと、「……そう理屈を言われると困る」と、父は苦い顔をした。「……何もお前の為にするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だつて世間への義理ぐらひは知つているだろう」と言う。母はこうなると女だけにしどろもどろな事を言つた。その代り口数から言うと、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかつた。(本文)

\*

\*

さて、この場面は、所謂「卒業祝い」をどうするかで、三人三様の「考え方」が披瀝されているところであるが、まず、「私」という人は、次のように考えるわけである。つまり、私は帰つた当日から、或はこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断つた。「……あんまり仰山な事は止してください」と。

その理由として、「……私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食つたりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いと言つた風の人ばかり揃つていた」とある。これは、例えば、「私」の「大学卒業」を心から祝つてくれるような人達ではなく、その「最後の目的」(つまり「真の目的」)は、結局、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎの宴会などがしたいだけであり、そういう「どんちゃん騒ぎの宴会」などが出来るような「行事や祝い」その他などがあればよいと思つていような人たちばかりだと思つているのであり、「……私は子供の時から彼らの席に侍するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛は一層甚しいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙(下品で卑しい人)を集めて騒ぐのは止せとも言いかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した」とある。もちろん、これは、この「私」という人がまだ世間をよく知らない若い人ならではの「考え方」に沿つているのであり、

むしろ「飲み食い」だけで人が集まって来るのではなく、むしろ「社会的な付き合い」として人が集まって来るのである。また、「卒業祝い」をするのも、親戚や近所の人たちに自分の息子が無事に「大学を卒業することが出来た」ということでの感謝とそのことを広く知ってもらうためのものでもあるのである。

例えば、「結婚式」や「披露宴」なども全く同じことであるが、それは、今までの「恋人関係」から正式の「夫婦関係」になるためのいわば一つの「社会的な儀式」であり、これによって、二人の「関係」は国や地方自治体などをはじめ、家族や親戚或いは友達関係や世間一般の人たちに認められたまさに正式な「社会的な結びつき」の関係」となり、それによって、地方自治体などからも実に様々な「社会保障」などが得られると共に、いつでもどのようなことを夫婦で行なおうと、それが犯罪的なことでもない限りは、基本的には認められていることであり、早く子供を作った方が良いなどと勧められたりするものだが、それもこれも、まさに「社会的に認められた結びつきの関係」であるからである。

つまり、「恋人関係」と「夫婦関係」との「決定的な違い」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、「恋人関係」とは、すなわち、二人だけが認め合っている「個人的な結びつき」に過ぎず、社会的に認められた関係ではないので、それゆえ、他人から絶えずああでもないこうでもないといふ色々なことを言われ続けることにもなりかねないが、一方、「夫婦関係」の場合は、まさに国や地方自治体などが正式に認めた「社会的な結びつき」であり、それゆえ、夫婦でいつでもどのようなことを行なっても、それが何か犯罪的な事でもない限りは、基本的には認められている「社会的な結びつきの関係」にあり、であり、それゆえ、世間の人たちも、その夫婦が二人でいるのをあれこれ言う人は一人もいないのである。

一方、母親は、「……仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うのである。母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰ったと同じ程度に、重く見ているらしかったとある。それでは、なぜ、母親はこのような「考え方」になるのだろうか？ それは、次のようなことである。

まず、一般論として、父親はふつう「外に働き」に出、子供は「幼稚園」や「学校」などに通うことになる。一方、家に残るのは、ふつう母親であり、実に様々な「家事や育児或いは介護その他」などを行なうことになる。また、昼間、近所の人や知り合いの人などに会えば、そこでいろいろなおしゃべりなどをするにもなるが、その内容の多くは、今日の天気や最近の社会の出来事、また、それぞれの家庭でこういうことがあった、例えば、子供がどうした孫がどうしたなどの話になるかと思うが、そのように「母親」というのは、一般に、最も「近所付き合い」が多いのであり、時には他人の「子供自慢」などを聞かされることもあるかと思うが、そのような中で、「……お宅のお子さんはどうなんですか？」と聞かれた時に、自慢出来るような子供であれば、母親としては誇らしいことにもなるのだろう。ましてや東京の「帝国大学」（今の東大）を無事に卒業出来たということとは、何よりも自慢になるものであり、それゆえ、「……仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うことにもなるのである。

また、父親は、「……呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とか言うから」と、こ

れは父の言葉であった。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とか言いたがる人々であった。「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と、父はこうも言った。「……お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えたのである。——つまり、日本の「村社会」では、何よりも「しきたりや人間関係」などが最も大事であり、それゆえ、いわば「やるべきこと」を怠れば、村の人たちから、それこそ、何だかんだと陰口を言われることにもなるのである。

それゆえ、私は我を張る訳にも行かなかった。どうでも二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。「……つまり私のためなら、止して下さいと言うだけなんです。陰で何か言われるのが厭だからというご主意なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事が私が強いて主張したって仕方がありません」と言うのと、「……そう理屈を言われると困る」と、父は苦い顔をした。「……何もお前の為にするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって世間への義理（社会的な付き合い）ぐらいは知っているだろう」と言う。母はこうなると女だけにしどろもどろな事を言った。その代り口数から言う、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかったのである。

### 三、日取り決めるも天皇の御病気の報知（後）

さて、「……学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」と、父はただこれだけしか言わなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かず、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜また気を更えて、客を呼ぶなら何日にするかと私の都合を聞いた。都合の好いも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起きしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であった。私はこの穏やかな父の前に拘泥らない頭を下げた。私は父と相談の上招待の日取りを極めた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であった。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡ったこの事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まろうとした私の卒業祝いを、塵のごとくに吹き払った。「……まあ、ご遠慮申した方がよからう」と、眼鏡を掛けて新聞を見ていた父はこう言った。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大挙へ行幸になった陛下を憶い出したりした。（本文）

\*

\*

さて、「……学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」と、父はただこれだけしか言わなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見たのである。——これは、もし「学問」（高等教育）などを受けなければ、もっと素直に「親の言うことを聞いてくれる子になった」だろうに、却って「学問」（大学）などを出たがために、親の言うことに対して、いちいち「ああでもないこうでもない」と理屈を付けて反対して来る」ような子になってしまい、それに対して、父親としてははつきりと「不平・不満」を持っているのである。

しかも、「……私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かず」とあるが、

これは、いわば親に対して「口幅くちばしつたいことを言う」（つまり「身の程もわきまえず、大きなことや生意気なことを言ったりしていること」）に気づかず、「……父の不平の方ばかりを無理のように思った」とあるが、これも、自分の論理（言い分）の方こそが正しいのに、父親がそれに対して「不平・不満」を持つのは「無理のように」（つまり「間違っている」）ように思ったということである。

ところが、その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つたこの事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払つた。「……まあ、（今回は）ご遠慮申した方がよかるう」と、眼鏡を掛けて新聞を見ていた父はこう言つたとある。——この「……明治天皇の御病気とその後崩御その約一ヶ月半後に明治天皇の『御大葬の夜』の乃木大将の殉死」などが、先生の「自殺への決心」への大きな一つの切っ掛けになつて行くものである。ちなみに、「……私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸（天皇のおでかけ）になつた陛下を憶い出したりした」とあるが、これは、当時の「東京帝国大学」の卒業式には、直接、明治天皇が臨席して、成績優秀な卒業生には「銀時計」などを授与したのである。

#### 四、友達や先生に葉書や手紙を書く（前）

小勢こせいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私は行李こしりを解いて書物を繕ひもとき始めた。何故なぜか私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくつて行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強が出来た。

私は稍ややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時にはわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあつた。眼が覚めると、蟬せみの声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底を掻き乱した。私は凝じつとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸むねに抱いだいた。

私は筆を執とつて友達のだれかれに短い端書はがき又は長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残つていた。あるものは遠い故郷に帰つていた。返事の来るのも、音信たよりの届かないのもあつた。私はもとより先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字さいじで三枚ばかり国へ帰つてから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つづつたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にいるだろうかと疑うたつた。先生が奥さんといつしよに宅うちを空あける場合には、五十恰好がっこうの切下きりさげの女の人がどこからか来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類しんるいと思ひ違えていた。先生は「……私には親類しんるいはありませんよ」と答えた。先生の郷里きょうりにいる続きつづきあいの人々と、先生は一向いっこう音信の取り遣りやりをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚しんせきであつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽たのしに後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下きりさげのお婆おばさんは、それをすぐ転地先へ送つてくれるだけの気転きてんと親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれという程ほどの必要の事も書いてないのを、

私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。(本文)

\*

\*

さて、「私」という人は、無事に「大学」を卒業して「実家」に戻っている状態であるが、その実家は、「……小勢な人数には広過ぎる古い家のひっそりしている中に、私は行李を解いて書物を繻き始めた。何故か私は気が落ち付かなかった。あの目眩しい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁を一枚一枚まくって行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強が出来た。私は稍ともすると机にもたれて仮寝をした。時にはわざわざ枕さえ出して本式に昼寝を貪ぼる事もあった。眼が覚めると、蟬の声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底を掻き乱した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた」とある。

これは、大学を無事に卒業出来て、今は「ゆつたりとした気分」の状態にあるかと思ふが、しかも、これというはつきりとした「目標」がないために、逆に、毎日だからだと時を過ごしている状態であり、また、「……私は凝と蟬の声を聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた」とあるが、これも、いわば「……鳴く蟬の明日は無き身の激しさか」ということであり、それは、父親の病状などとも重ね合わせて聞いているのだろう。

そして、暇なので、「……私は筆を執つて友達のだれかれに短い端書又は長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信の届かないのもあった。私はもとより先生を忘れなかった。原稿紙へ細字で三枚ばかり国へ帰ってから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にいるだろうかと思つた。先生が奥さんといつしよに宅を空ける場合には、五十恰好の切下の女の人はどこから来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思ひ違えていた。先生は「……私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であつた。(これは「先生は親類とは完全に縁を絶つて、」ということである)。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行ったあとへこの郵便が届いたら、あの切下(髪)のお婆さんは、それをすぐ転地先へ送ってくれるだけの気転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれという程の必要の事も書いてないのを、私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかったとある。(その理由は、その頃、先生は「自分の身をどうしたらよいのか?」と深く真剣に考え悩んでいて、それどころではなかったということである。)

#### 四、陛下の御病氣と父親の病状(後)

父はこの前の冬に帰つて来た時ほど将棋を差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜つたまま、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下の御病氣以後父は凝と考え込ん



でいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。「……おいご覧、今日も天子様の事が詳しく出ている」と、父は陛下のことを、つねに天子様と言っていた。

「……勿体ない話だが、天子様の御病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」と、こういう父の顔には深い掛念の曇がかかっていた。こう言われる私の胸にはまた父がいっ艶れるか分らないという心配がひらめいた。「……しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」と、父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「……お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃる通りに、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」と言うのと、母は私の言葉を聞いて当惑するような顔をした。「……ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」と言うので、私は床の間から将棋盤を取り卸して、ほこりを拭いた。(本文)

\*

\*

さて、「……父はこの前の冬に帰って来た時ほど将棋を差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜ったまま、床の間の隅に片寄せられてあった」とある。これは、一体、何を意味するかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、前の時には、「将棋」それ自体を差して楽しむことが出来るようなまだ「心の余裕」があつたのである。だからこそ、勝つても負けても、必ず「もう一番」やろうとなるのである。ところが、今回は、「将棋」を差して楽しめるような「心の余裕」はもう無くなっているのである。

ことに陛下の御病氣以後父は凝と考え込んでいるように見えた。そして、「……毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ」とある。——これは、いったい何を意味するかと言えば、この頃は、まだ「ラジオ放送」(大正十四年開始)もなく、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によつていたのである。しかも、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来たのである。そして、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。「……おいご覧、今日も天子様の事が詳しく出ている」と、父は陛下のことを、つねに天子様と言っていた、となるのである。

そして、「……勿体ない話だが、天子様の御病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」と、こういう父の顔には深い掛念の曇がかかっていた。こう言われる私の胸にはまた父がいっ艶れるか分らないという心配がひらめいた。「……しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」と、父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかかって来そうな危険を予感しているらしかった。「……お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃる通りに、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」と言うのと、母は私の言葉を聞いて当惑するような顔をした。「……ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」と言うので、私は床の間から将棋盤を取り卸して、ほこりを拭いたとある。(この場面は、父親もまた「私」という人も、その病状をかなり深刻に受け止め始めているが、一方、母親は、むしろ不安はよぎっていないながらも、まだ大丈夫だろうと信じたいのである。)

\*

\*

五、父親の元気が衰<sup>おと</sup>ろえて行く（前）

## 五、父親の元気が衰ろえて行く（前）

父の元気は次第に衰えて行つた。私を驚かせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閉却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起つた。私は父の健康についてよく母と話し合った。

「……全く気のせいだよ」と母が言った。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかった。「……気じゃない。本当に身体が悪くないんでしょか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」と、私はこう言つて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。「……今年の夏はお前もつまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事が出来ず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」と言うのであつた。

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうと言ひ出したのは、それから一週間後であつた。そうして愈と極めた日はそれからまた一週間の余も先になつていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎に帰つた私は、お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかつた。（本文）

\*

\*

さて、父の元気は次第に衰えて行つた。その「象徴的なもの」として、「……私を驚かせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閉却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起つた」。私は父の健康についてよく母と話し合った。「……全く気のせいだよ」と母が言った。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。これは、むろん不安ははつきりとよぎつていながらも、まだ大丈夫だろうと信じたのである。

一方、「私」という人は、「……気じゃない。本当に身体が悪かないんでしょか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」と、私はこう言つて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。すると、母親は、「……今年の夏はお前もつまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事が出来ず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」と言うのであつた。

これは、母親の「頭の中」（或いは「心の中」）では、息子の晴れ舞台にもなつたであろう「卒業祝い」というものが出来なかつたことを未だ残念がつているのである。一方、「私」という人は、むしろ「……お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であり」、その中止を密かに喜んでいるのである。

## 五、天皇の崩御と父親の病状の悪化（後）

さて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ」と言った。「……ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と、父はその後を言わなかった。

私は黒い旗竿の球を買った。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「……あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていませんか」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあつた。また先生に見せるのが恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふっと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。(先生に宛ててそういう事を書いて仕方がないとも思つたし、前例に徴して見ると、とても返事をくれそうになかったから)。私は淋しかった。それで手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いと思うのであつた。(本文)

\*

\*

まず、天皇の崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ」と言った。「……ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と、父はその後を言わなかった。——これは、父親の受けた「衝撃」がいかに大きかつたかを物語っていると共に、天皇と一緒に何とか頑張つて来たつもりでいたが、天皇の崩御の報知によつて、今度は「己も……」(つまり今度は「己の番か!」)という想いに襲われているのである。そして、「……私は黒い旗竿の球を買ったために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった」とある。

例えば、昔は、祝日には、国旗を掲げる習慣があつたが、今は、どうなのか? それともかく、旗竿の先端に付いているのは「金色の球」であるが、その旗竿の球を(黒い旗竿の球)で包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。(これは、弔旗で、天皇様への哀悼の意を表す)。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。

私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「……あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもなかった。また先生に見せるのが恥ずかしくもあった。——それは、一体、なぜなのか？ 先生の家は、新潟県の地元ではよく知られた「旧家」（名家）であったが、「私」の郷里の宅は、一体、何県にあるのか？ はつきりと明記されていないので、それを敢えて推測してみると、恐らく、次のようになるかと思う。

まず、「私」という人は、友達から鎌倉の海水浴場に来ないかと葉書を受け取る。その友達は、中国（地方）のある資産家の息子で金に不自由のない男であったとある。この友達とはかなり「親しい友達関係」にあるからこそ、わざわざ呼び出されているのだろう。だとすれば、「私」という人は、同じ「中国」（地方）の出身かも知れない。次に、兄は、学問をした結果、今は遠国にいとあり、それは「九州」（地方）である。だとすれば、「私」という人は、当然、九州の人ではない。そして、もう一つは、母親は、「仰山」という言葉（方言）を多用している。この「方言」は、例えば、愛知県、岐阜県、関西方面などでも使われているとあるが、「私」という人には、「名古屋訛りも関西訛りも全くない」ので、「恐らく」この地方の人ではない。また、「中国」（地方）では、岡山や広島の方言として、「仰山」という言葉があるとある。これらを総合してみると、例えば、中国地方（五県）は、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県であるが、島根県と山口県は九州に近いので、違うかも知れない。だとすれば、残るは、鳥取県、岡山県、広島県のどれかになるが、恐らく、岡山県か広島県になるのではないかと思う。

ちなみに、昔は「近国、中国、遠国」という呼び方があり、「近国」は、京都や奈良や大阪を中心とした関西地方、「遠国」は、「九州」（地方）（七県）、そして、その中間にあるので「中国」（地方）五県となり、それに「四国」（地方）四県があるのである。

私はまた一人家のなかへ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。（それは、「先生」の突然の「自殺」であった。）

私は今度の事件（天皇の崩御）について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。（先生に宛ててそういう事を書いてでも仕方がないとも思つたし、前例に倣して見ると、とても返事をくれそうになかったから）私は淋しかった。それで手紙を書くのであった。そうして返事が来れば好いと思うのであった。「これは、一体、どのような心理かと問えば、それは、先生をいわば「心の抛り所」（一点の燈火）として見ているのであり、それ

ゆえ、手紙を出して、先生から何らの返事も来なければ、淋しいし、また、手紙を出して、先生から何らかの返事が来れば好い（嬉しい）という心理になるのである。」

#### 六、「私」の就職口の問題について（前）

八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな地位を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、随分骨を折って、教師の職にあり付きながら返事を出しているものがあるから、その方へ廻してやったら好かろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであった。「……そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」と言うのであった。こう言ってくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。「……相当の口つて、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」と言うのと、「……しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃ此方も困る。人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすつて何をしてお出でですかと聞かれた時に返事が出来ないようじゃ、おれも肩身が狭いから」と言う。父は洪面をつくった。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円位なものだろうかと言われたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体な人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていた。（本文）

\*

\*

さて、八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな地位を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、随分骨を折って、教師の職にあり付きたがっているものがあるから、その方へ廻してやったら好かろうと書いたとある。（例えば、第一部でも、先生や奥さんとの会話の中で、卒業してこれからどうするのという問題が出て来た時に、奥さんが、「……先生？ それともお役人？」という場面があるが、「私」という人は、就職のことはまだ何も考えてはいないと言うのであった。）

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであった。「……そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」と言うのであつ

た。こう言ってくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。「……相当の口つて、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」と言くと、「……しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃ此方も困る。人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすって何をしてお出でですかと聞かれた時に返事が出来ないようじゃ、おれも肩身が狭いから」と。

父は洪面をつくつた。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円位なものだろうかと言われたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体な人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていたとある。——これは、ふつう父や母の方が世間一般の常識的な「考え方」になるかと思うが、それでは、なぜ、「私」という人は、いわゆる「就職」のことを考えようとはしないのだろうか？ それは、恐らく、次のようなことではないかと思う。つまり、「私」という人は、先生から心の底から納得の行くような「人生の教訓」のようなものを得てから、それから「就職先」のことは考えてみたいと思っているのかも知れない。

#### 六、母は就職口を先生に頼んだらと（後）

母は、「……お前のよく先生先生という方にもお願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言うのであった。母はこうより外に先生を解釈する事が出来なかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きていううちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。卒業したから、地位の周旋（幹旋）をしてやろうという人ではなかった。「……その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。「……何にもしていないんです」と私が答えた。私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶している筈であった。「……何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものがね」と言うのであった。

父はこう言つて、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。「……おれのような人間だつて、月給こそ貰つちやいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」と、父はこうも言った。私はそれでもまだ黙っていた。「……お前の言うような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。「……いいえ」と私は答えた。「……じゃ仕方がないじゃないか。何故頼まないんだい。手紙でも好いからお出しな」、「ええ」と、私は生返事をして席を立った。（本文）

\*

\*

さて、母は、「……お前のよく先生先生という方にもお願いしたら好いじゃないか。

こんな時こそ」と言うのであった。母はこうより外に先生を解釈する事が出来なかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。卒業したから、地位の周旋（しゅうせん）（斡旋）をしてやろうという人ではなかった。「……その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。「……何にもしていないんです」と私が答えた。私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げつつもりであった。そうして父はたしかにそれを記憶している筈であった。「……何もしないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものだがね」と言うのであった。

父はこう言って、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟（ひつじやう）やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。「……おれのような人間だって、月給こそ貰（もら）っちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」と、父はこうも言った。私はそれでもまだ黙っていた。「……お前の言うような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。「……いいえ」と私は答えた。「……じゃ仕方がないじゃないか。何故頼まないんだい。手紙でも好（い）いからお出しな」「ええ」と、私は生返事（なまへんじ）をして席を立ったとある。

これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「私」という人にとって、「先生」という人は、いわば「人生の何たるかを教えてくれる存在」であり、だからこそ、まさに「先生」と呼んでいるのであり、それゆえ、ただ単に、社会的地位があるとか、人生の成功者であるとか、或いは大学の教授であるとか、その他、そのような人たちを「先生」と呼ぶのとは全く違う意味合いになるのである。例えば、中国の有名な「孔子」という人は、まさに「先生」と呼ばれていたかと思うが、そのような意味合いの「先生」になるのである。

#### 七、先生に就職口のお願いの手紙を書く（前）

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者の方の来るたびに蒼蠅（そうろう）質問を掛けて相手を困らす質でもなかった。医者の方でもまた遠慮して何とも言わなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像して見るらしかった。「……小供（こども）に学問をさせるのも、好（よ）し悪（わる）しだね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅（うち）へ帰って来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」と言うのであった。

学問をした結果兄は今遠国（えんこく）にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴（ぐち）はもとより不合理ではなかった。永年（ながねん）住み古した田舎（なかや）家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋（さび）しいに違（ちが）いなかった。

わが家は動かす事の出来ないものと父は信じ切っていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事の出来ないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤獨（こどく）な母を、たった一人伽藍堂（がらんどう）のわが家に取り残すのもまた甚（はなは）だしい不安であった。それなのに、東京で好い地位を求めると言って、私を強（し）いたがる父の頭には矛盾があった。私はその矛盾をおかしく思ったと同時に、そのお蔭（かげ）でまた東京へ出られるのを喜んだ。



私は父や母の手前、この地位を出来るだけの努力で求めつつある如くに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出来る事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いがらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事も出来まいと思いがらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。(本文)

\*

\*

さて、父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者 of 来るたびに蒼蠅質問を掛けて相手を困らす質でもなかった。医者の方でもまた遠慮して何とも言わなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像して見るらしかった。「……小供に学問をさせるのも、好し悪だね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅へ帰つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」と言うのであった。

学問をした結果兄は今遠国にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつたとある。(親は、子を大事に育て、その子は、すくすくと育ち、やがて巣立っていく。それは、親としては、嬉しいことであるが、また、寂しいことでもあるのだろう。)

わが家は動かす事の出来ないものと信じ切つていた。その中に住む母もまた命の間は、動かす事の出来ないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たった一人伽藍堂のわが家に取り残すのもまた甚しい不安であった。それなのに、東京で好い地位を求めると言つて、私を強いたがる父の頭には矛盾があつた。私はその矛盾をおかしく思つたと同時に、そのお蔭でまた東京へ出られるのを喜んだ。(母親の面倒は、兄も私も妹も出来そうにないので、当面、親戚の叔父さんにも頼むかという展開へとなるのである……)。

私は父や母の手前、この地位を出来るだけの努力で求めつつある如くに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出来る事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いがらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事も出来まいと思いがらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いたとある。(これらは、まだ若いので、親のことその他のことでも、どうしても自分のことを「第一」《中心》に考えてしまう傾向があるのかも知れない。)

#### 七、先生からの返事を待つも来なかつた(後)

私はそれを封じて出す前に母に向つて言った。「……先生に手紙を書きましたよ。あなたの仰しやつた通り。一寸読んでご覧なさい」と言つた。

母は私の想像した如くそれを読まなかつた。「……そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他が気を付けないでも、自分で早くやるものだよ」と言うのであつた。

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のような感じがした。「……しかし手紙じや用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなあって、私が東京へ出てからでなくっちゃ」と言うのと、「……そりゃそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はないよ」と言う。「……ええ。とにかく返事は来るに極つてますから、そうしたらまたお話ししましょう」と。私はこんな事に掛けて几帳面な先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外れた。先生からは一週間経つても何の音信もなかった。「……大方どこかへ避暑にでも行っているんでしよう」と言った。

私は母に向かって言訳らしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強いても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があつた。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父に言い出す機会を得ずに過ぎた。(本文)

\*

\*

さて、先生からの「返事」は来なかつたが、それには、次のような事情があつたのである。それは、第三部の「先生と遺書」の冒頭部分に出て来るものであるが、それは、次のようなものである。つまり、「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあつたのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ濟まんとは考えたのです。しかし自由すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたつた一人で暮していると言つた方が適切なくらいの私には、そういう努力を敢えてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実を言うと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩らつていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は『それとも』という言葉を中心で繰り返すたびにぞつとしました。(中略)

その時の私には、あなたというものが殆んど存在していなかつたと言つても誇張ではありません。一歩進めて言うと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつてまるで無意味なものでした。どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。——宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位と言つて藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ濟まないあなたに対して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無様な言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思ひます」となるのである。

\*

\*

八、九月始め、東京へ出ようと考えた（前）

八、九月始め、東京へ出ようと考えた（前）

九月始めになって、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向って当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「……此所こゝにこうしていったって、あなたの仰おつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」と、私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事を言った。「……無論口の見付かるまでで好いですから」とも言った。私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。「……そりや僅わずかの間あいだの事ことだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永ながくはいけないよ。相当の地位を得次第しだい独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話ひとになんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」と言うのであった。

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとを言った。その中には、「……昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。それらを私はただ黙って聞いていた。小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かつた。「……お母さんに日を見てもらいなさい」と言うので、「……そうしましょう」と言った。その時の私は父の前に存外おとな大人おとなしかつた。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎いなかを出ようとした。父はまた私を引き留めた。「……お前が東京へ行くと宅うちはまた淋さみしくなる。何しろ己おれとお母さんだけなんだからね。そのおれも身体からださえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言うのであった。（本文）

\*

\*

さて、九月始めになって、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向って当分今まで通り「学資」（生活費）を送ってくれるようにと頼んだ。

「……此所こゝにこうしていったって、あなたの仰おつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」と、私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事を言った。「……無論口の見付かるまでで好いですから」とも言った。私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。（これは、言うまでもなく、仕事を探しに行くのではなく、何よりも先生に会いに行くためであり、また、そこで生活するための資金を得るための方便でもある）。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。「……そりや僅わずかの間あいだの事ことだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永ながくはいけないよ。相当の地位を得次第しだい独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話ひとになんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」と言うのであった。（これは、まさにその通りであり、若い頃は、親がどれほど苦勞をして金を稼いでいるかなどは全く考えずに、親が金を出すのは当然当たり前あたりまえの如くに考えているのである。）

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとを言った。その中には、「……昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。（これも非常に興味深い言葉であり、昔は、家のために年季奉公などに出されたりしたものである）。それらを私はただ黙って聞いていた。小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とう

とした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かった。「……お母さんに日を見てもらいなさい」と言うので、「……そうしましょう」と言った。（これは、よく「その日が大安か仏滅か或いは友引かなど」を見たりするものである）。その時の私は父の前に存外大人しかった。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎を出ようとした。父はまた私を引き留めた。「……お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言うのであった。（これは、意外と父親は、このまま田舎にいてくれることを密かに望むところも（母親の為にも）少しはあったのかも知れない。しかし、子供の夢や希望また将来のことなどを考え合わせれば、この小さな田舎町に引き留めておくことには、やはり躊躇いが生じているのだろう。）

#### 八、私を取り巻く人の運命が動いているように（後）

私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間、中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蝉の声がつくつく法師の声に変る如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋しそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶い浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上り易かった。

私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解っていないかった。話す約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かった。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であった。私は母に日を見てもらって、東京へ立つ日取りを極めた。（本文）

\*

\*

さて、私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間、中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていたとある。——まず、蝉は、ふつうアブラゼミからミンミンゼミへそれからツクツクボウシへと鳴き移って行くものであるが、「……私の哀愁は、いつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた」とある。それは、結局、「……鳴く蝉の明日は無き身

の激しさか」ということであり、あれほど激しく鳴いていた蝉も、やがて亡骸となつて死んでしまふ運命であり、そこに「生命の儂さ」を感じているのであり、だからこそ、それが「私の哀愁」となつて行くのである。

つまり、「……私の哀愁は、この夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蟬の声がつくつく法師の聲に変わる如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた」とあるが、それは、明治天皇の崩御をはじめ、父親の病状の悪化、そして、先生のまさかの自殺という、そのような私を取り巻く人の運命の変化を、「私」という人は、なぜか蝉の鳴き声の変化から感じていたのである。

そして、父と先生とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上り易かった。——私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあただけであった。先生の多くはまだ私に解つていなかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとつて薄暗かった。(だからこそ、もつと知りたいという強い欲求となり)、私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとつて大いな苦痛であった。私は母に日を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極めた。(それは早く先生に会いたいということでもある。)

ちなみに、蝉については、「子供の遊び4」で書いた内容があるので、それを参考程度に引用してみると、それは、次のようなものである。

まず、初夏から秋にかけては、様々な『セミ』の鳴き声が聞こえて来るかと思うが、例えば、ジージーと鳴くアブラゼミや、チーチーと鳴くのが、ニンニンゼミであり、カナカナと鳴くのは、ヒグラシ(カナカナ)であり、また、ミンミンと鳴くのは、ミンミンゼミであり、そして、オーシーシクシクと鳴くのが、ツクツクボウシである。

ところで、その「セミの一生」というのは、まず樹皮の下などに産みつけられたタマゴは、翌年の梅雨の時期に「幼虫」となり、その「幼虫」は、木から下りて、土の中で生活をするようになるが、その「土の中」での生活がかなり長くて、主に木の根の汁などを吸つて生活している。——例えば、ツクツクボウシは、約一〜二年、アブラムシとミンミンゼミは、約二〜四年、クマゼミは、約二〜五年、そして、ニイニイゼミは、約四〜五年ぐらいとされているが、むろん、それらは、それぞれ育つ「環境や個体差」などによつても違いは生じて来るものであり、長い間、その「土の中」で十分に成長した「幼虫」から、やがて、夕方頃、地上に出て来て、近くの木の幹に登り、そこで日没頃から「脱皮」を始めて、約二、三時間ぐらいで「成虫」(セミ)となるのだそうである。そして、その「成虫」(セミ)というのは、木の幹の「樹液」を吸つて生きているが、オスもメスも「種族保存欲」(それは「交尾と産卵」とを終えて、約二週間から一ヶ月ぐらいで死んでしまふのだそうである。また、セミの「発音器」は、オスのセミの「腹の基部」にあり、その「発音筋」を収縮させて音を出し、それが「共鳴室」で拡大されて、大きな音となつて外に出て来るのだそうであるが、鳴くのはオスだけである。

## 九、父親が風呂場で倒れる(前)

私がいよいよ立とうという間際になつて、(たしか二日前の夕方の事であつたと思うが、)

父はまた突然引つ繰り返った。私はその時書物や衣類を詰めた行李をからげていた。父は風呂へ入ったところであった。父の背中を流しに行つた母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体のまま母に後から抱かされている父を見た。それでも座敷へ伴て戻つた時、父はもう大丈夫だと言つた。念の為に枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷やしていた私は、九時頃になつてようやく形ばかりの夜食を済ました。

翌日になると父は思つたより元気が好かつた。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行つた。……もう大丈夫」と、父は去年の暮倒れた時に私に向つて言つたと同じ言葉をもた繰り返した。その時は果して口で言つた通りまあ大丈夫であつた。私は今度も或はそうなるかも知れないと思つた。しかし医者はまだ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然とした事を話してくれなかつた。私は不安のために、出立の日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかつた。

「……もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。「……そうしておくれ」と母が頼んだ。母は父が庭へ出たり背戸へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。「……お前は今日東京へ行く筈じゃなかつたか」と父が聞いた。「……ええ、少し延ばしました」と私が答えた。「……おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇した。そうだと言へば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであつた。私は父の神経を過敏にしたくなかつた。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかつた。「……気の毒だね」と言つて、庭の方を向いた。(本文)

\*

\*

さて、私がいよいよ立とうという間際になつて、(たしか二日前の夕方の事であつたと思うが)父はまた突然引つ繰り返つた。私はその時書物や衣類を詰めた行李をからげていた。父は風呂へ入つたところであつた。父の背中を流しに行つた母が大きな声を出して私を呼んだ。私は裸体のまま母に後から抱かれている父を見た。それでも座敷へ伴て戻つた時、父はもう大丈夫だと言つた。念の為に枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷やしていた私は、九時頃になつてようやく形ばかりの夜食を済ましたとある。

さて、父親が「風呂場で倒れる」という展開によつて、事態は一気に「大きく動き出す」ことになるが、それは、第一部の「先生と私」の本文の中にも、先生は、「……そんなに容易く考えられる病気じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたとある。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によつて、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廃物が血中にたまるのが原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なつていのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本心に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言つた。「……毒が脳へ廻るようになる、もうそれっきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。つまり、「卒倒」(倒れる)ということとは、この「腎臓病」の大きな「特徴の一つ」になつていのである。

翌日になると父は思つたより元気が好かつた。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行つた。……もう大丈夫」と、父は去年の暮倒れた時に私に向つて言つたと同じ言葉を

また繰り返した。その時は果して口で言った通りまあ大丈夫であった。私は今度も或はそうなるかも知れないと思った。しかし医者はただ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然した事を話してくれなかった。私は不安のために、出立の日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。(これは、緊急事態発生でもう仕方のないことである。)

「……もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。「……そうしておくれ」と母が頼んだ。母は父が庭へ出たり背戸へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。「……お前は今日東京へ行く筈じゃなかったか」と父が聞いた。「……ええ、少し延ばしました」と私が答えた。「……おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇した。そうだと云えば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであった。私は父の神経を過敏にしたくなかった。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかった。「……気の毒だね」と言つて、庭の方を向いたとある。

これは、父親も、自分の「病状の悪化」をはっきりと自覚しているとともに、息子に「余計な心配」をかけていることに「済まないね」(気の毒だね)と言っているのである。

### 九、三、四日後、再び風呂場で倒れる(後)

私は自分の部屋に這入つて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支ないように、堅く括られたままであった。私はほんやりその前に立つて、また繩を解こうかと考えた。

私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ぎた。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥を命じた。「……どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私に言った。母の顔は如何にも心細そうであった。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父には殆んど何の苦悶もなかった。話をするところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であった。その上食欲は不断よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に言う事を聞かなかった。「……どうせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくっちゃ」と言うのであった。

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入れられるには住んでいなかったのである。夜に入つてかき餅などを焼いてもらつてぼり嚙んだ。「……どうしてこう渴くのかね。やっぱりに心に丈夫の所があるのかも知れないよ」と、母は失望していいところに却つて頼みを置いた。そのくせ病気の時にしか使われない渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかった。淋しいからもつと居てくれというのが重なる理由であったが、母や私が、食べたいだけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしい。(本文)

\*

\*

さて、私は自分の部屋に這入つて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出して差支ないように、堅く括られたままであった。私はほんやりその前に立つて、また繩を解こうかと考えた。——私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ぎた。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥を命じた。(この



ように頻繁に「卒倒」が起こるのは、末期の症状になるのだろう。「……どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私に言った。母の顔は如何にも心細うであつた。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父には殆んど何の苦悶もなかつた。話をするところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であつた。その上食欲は不断よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に言う事を聞かなかつた。「……どうせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくっちゃ」と言うのであつた。

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入られるするには住んでいなかったのである。夜に入つてかき餅などを焼いてもらつてぼりぼり嚙んだ。「……どうしてこう渴くのかね。やつぱり心に丈夫の所があるのかも知れないよ」と、母は失望していいところへ却つて頼みを置いた。そのくせ病氣の時にしか使わな

い渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかつた。淋しいからもつと居てくれというのが重なる理由であつたが、母や私が、食べたいただけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしいとある。

ちなみに、今日の医学では、一般に、「……腎臓機能の低下が進むと、夜間の頻尿をはじめ、吐き気や食欲不振、むくみやかゆみ、皮膚の色素沈着や息苦しき、高血圧など尿毒症と呼ばれる症状が現れると共に、痙攣、感覚の喪失、手足のしびれ、その他などの神経症状のほか、心不全、肺水腫など致命的な合併症も懸念される」となっている。一方、食欲が異常に進む病氣として、初期の糖尿病を初めとして、ストレスや鬱状態或いは睡眠不足などの精神的要因から過食になる場合もあれば、また、軽い胃炎や胃潰瘍、そして、甲状腺機能亢進病、その他などがあるということである。

#### 十、兄や妹に手紙とやがて電報を打つ（前）

父の病氣は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と言つて、折角都合して来たには来たが、間に合わなかつたと言われるのも辛かつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。「……そう判然した事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して下さい」と、

停車場のある町から迎えた医者は私にこう言つた。私は母と相談して、その医者の周旋（仲立ち）で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹つている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「……今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」と言うのであつた。母は仕方なしに「……その時は私もいっしょに伴れて行つて

頂きましょう」などと調子を合せていた。時とするとまた非常に淋しがった。

「……おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」と、私はこの「……おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。私は笑いを帯びた先生の顔と、縁喜でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「……おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかった。しかし口の前では何とか父を紛らさなければならなかった。

「……そんな弱い事を仰しやっちゃいけませんよ。今に癒ったら東京へ遊びにいらつしやるはずじゃありませんか。お母さんといっしょに。今度いらつしやる時と吃驚しますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増えていますからね。電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝としていた時は、まあ二六時中一分もないと言っているくらいです」と、私は仕方がないから言わないでいい事まで喋舌った。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。(本文)

\*

\*

さて、父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めたのである。

ところで、当時(明治天皇崩御の頃)の「伝達手段」としては、新聞や雑誌或いは書物などをはじめ、個人的には「葉書と手紙それに急報の電報」ぐらいで、電話はまだ一般には普及していない。それゆえ、作品の中には電話のことは全く出て来ない。また、ラジオ放送は、大正十四年(一九二五年)であり、最初は「東京」で始まったとある。

さて、兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と言つて、折角都合して来たには来たが、間に合わなかつたと言われるのも辛かなかつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。「……そう判然とした事になると(つまりいつかは)私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して下さい」と、停車場のある町から迎えた医者には私にこう言つた。私は母と相談して、その医者の周旋(仲立ち)で、町の病院から「看護婦」を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。(この「看護婦」を一人頼むというのは、谷崎潤一郎の「鍵」の中にも、主人公の大学教授が「脳卒中」で倒れた時にもそのような対応をしている。)

父は死病に罹っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「……今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」と言うのであつた。母は仕方なしに「……その時は私もいっしょに伴れて行つて頂きましょう」などと調子を合せていた。時とするときとまた非常に淋しがつた。

「……おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」と、私はこの「……おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑いを帯

びた先生の顔と、縁喜でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「……おれが死んだら」は単純な仮定であった。(ところが、先生は本気であり、何が何でも妻の本心を聞いておきたかったのである。だからこそ、何度もしつこく聞いているのである)。今私が聞くのはいっつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかった。しかし口の先では何とか父を紛らさなければならなかった。

「……そんな弱い事を仰しゃつちやいけませんよ。今に癒たら東京へ遊びにいらつしやるはずじゃありませんか。お母さんといっしょに。今度いらつしやるときつと吃驚しますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増えていますからね。電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝としている時は、まあ二六時中一分もないと言つていくらいです」と、私は仕方がないから言わないでいい事まで喋舌った。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

ところで、日本の場合、江戸時代までは、人や物の運びは、ほとんど「水路」を利用して、「陸路」は、歩くか籠か輿か馬か荷車を引くしかなく、余りにも未発達であったのである。やがて、明治時代に入ると、今度は、人力車や馬車或いは鉄道その他の普及によって、人や物の運びは、今までの「水路」から、やがて「陸路」が非常に発達して来て、今日へと至っているのである。特に、明治時代の「鉄道」(汽車)の登場は、まさに画期的なものであり、それは、人や物を「陸路」で「大量に運ぶ」ことを始めて可能にしたのである。

#### 十、病人があるので家の出入りも多くなった(後)

病人があるので自然家の出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらの割で代る代る見舞に came。中には比較的遠くにいて平生疎遠なものもあった。「……どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘡せていないじゃないか」などと言つて帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであった。私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打つた。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知があった。妹はこの前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねて言い越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかった。(本文)

\*

\*

さて、病人があるので自然家の出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらの割で代る代る見舞に came。中には比較的遠くにいて平生疎遠なものもあった。「……どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘡せていないじゃないか」などと言つて帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めたのである。

ここまでの内容は、ごく自然に思われるが、しかし、今日であれば、多くの場合、いわゆる「病院に入院する」ことが多いのではないかと思う。その医療の歴史を見てみると、次のようなことらしいのです。――まず、江戸時代の医療は、漢方が中心で、自宅療養し

ている病人を医師が往診し、薬を処方する方法が一般的だったそうで、病院はなかったそうである。唯一の例外は、徳川吉宗が始めた「小石川養生所」があり、ここでは、貧しい病人を収容して薬草園から採った薬を与えて、看護していたらしい。その後、明治に入ると、官（国）公立病院、公的病院、民間（私立）病院などが出来て来ることになる。

まず、官（国）公立病院には、軍事病院をはじめ、伝染病に関する病院や精神疾患の病院その他などがあり、また、公的病院では、経済的困窮者への施療を理念としたものが多く、その代表として、日赤病院や済生会病院があり、そして、民間（市立）病院としては、最初は、西洋留学帰りの名医の経営する個人病院という色彩が強く、治療費は高額で、主に富裕層相手の治療が行われていたらしい。一方、民間病院のもう一つの流れとして、貧困者に無料或いは低額で医療を提供する慈善病院などがあったとある。（この文章は第六三巻第十一号「厚生の指標」二〇一六年九月からの引用である。）

ただ、当時の日本では、一部の大病院を別にすれば、小規模なものが多数を占めており、大正二年（一九一三年）時点で、一病院当たりの平均病床数は十三床に過ぎなかったとある。それゆえ、この頃は、多くの場合、自宅で「療養」し、かかり付けの「医師」などがいわば定期的に往診して治療し、最期は「自宅で息を引き取る」という形式の方が遙かに多かったのである。例えば、谷崎潤一郎の「鍵」の場合も、看護婦一人を頼み、最期は、自宅で「息を引き取る」という形になっている。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移って行くばかりであった。私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に「電報」を打った。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知があった。妹はこの前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねて言い越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかったとあり、その通り、妹の夫がやって来ることになるが、妹は「他国」に嫁いだというだけで、具体的に「何県」とは明記されていないのである。

\*

\*

十一、母親は先生への手紙をもう一度と（前）

十一、母親は先生への手紙をもう一度と(前)

こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭な気持ちに抑え付けられた。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

私が父の枕元を離れて、独り取り乱した書物の中に腕組をしているところへ母が顔を出した。「……少し午睡でもおしよ。お前もさぞ草臥れるだろう」と、母は私の気分を了解していながつた。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかつた。私は単簡に礼を述べた。母はまだ室の入口に立つていた。「……お父さんは？」と私が聞いた。「……今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然這入つて来て私の傍に坐つた。「……先生からまだ何とも言つて来ないかい」と聞いた。——母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかつた。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥つた。「……もう一遍手紙を出してご覧な」と母が言つた。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭うような私ではなかつた。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙に恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、或はそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。(本文)

\*

\*

さて、こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭な気持ちに抑え付けられた。

それでは、なぜ、そうなのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。例えば、「私」という人は、いわゆる「卒業論文」を書き上げるためには、毎日毎日、それこそ「論文」に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しみ、そして、「……ついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、あれほど頻繁に行き来していた、先生の敷居をも跨がなかつた」とあるように、これというはつきりとした、「目標(目的)」が

ある時には、誰でもそれに向かつて「一生懸命になれる」ものであるが、今の「私」という人は、無事に東京の「帝京大学」を卒業したばかりで、まだこれという新たな「目標（目的）」が、はつきりと見つからないために、それゆえ、毎日をだらだらと無為に過ごしてしまふような傾向があったということである。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に「地位、教育、性格」の全然異なつた二人の面影を眺めたのである。

私が父の枕元を離れて、独り取り乱した書物の中に腕組をしているところへ母が顔を出した。「……少し午睡でもおしよ。お前もさぞ草臥れるだろう」と、母は私の気分を了解していかなかった。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかった。（これは「自分の複雑な気分を母親に理解してもらえぬ」と期待するほど子供でもなかった）。私は単簡（簡単）に礼を述べた。母はまだ室の入口に立っていた。「……お父さんは？」と私が聞いた。「……今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然這入つて来て私の傍に坐つた。「……先生からまだ何とも言つて来ないかい」と聞いた。——母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかった。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥つた。「……もう一遍手紙を出してご覧な」と母が言つた。（母親がこの事にこだわる理由については、やがて次のところで自らその理由を語ることになるのである。）

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭うような私ではなかつた。けれどもこういう用件（就職口）で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙に恐れていたとある。（例えば、尊敬する孔子という先生からは「本来人生の何たるかを教えてもらふ存在」であり、その先生に最も俗にまみれたお金や地位などの条件のいい「就職口」などをお願いするなどは、何とも苦痛であり耐えられないという心理である。先生から「……あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、或はそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた」と続くのである。）

#### 十一、先生への手紙は結局出さなかつた（後）

「……手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻らなくっちゃ」と言つと、「……だつてお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」と言つので、「……だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしてあるつもりです」と言つと、「……そりゃ解り切つた話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかして置いて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」と言つ。

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのさわざわした際に持ち出したのか理解出来なかつた。私が父の病気をよそに、静かに坐つたり書見したりする余裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地があるのかしらと疑つた。その時、「……実はね」と母が言い出した。

「……実はお父さんの生きてお出のうちに、お前の口が極つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥なら気も慥なんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」と言うのであった。憐れな私は親孝行の出来ない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかった。(本文)

\*

\*

さて、「……手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻らなくっちゃ」と言うのと、「……だってお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」と言うので、「……だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしているつもりです」と言うのと、「……そりゃ解り切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」と言う。

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。(これは「私がなぜ東京に出るのかその本当の理由を知らないからである」)。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解出来なかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地があるのかしらと疑った。その時、「……実はね」と母が(本心)を言い出した。

「……実はお父さんの生きてお出のうちに、お前の口が極つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥なら気も慥なんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」と言うのであった。憐れな私は親孝行の出来ない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかったとある。(それは「書くこと自体苦痛であると共に、たとえ書いても返事は来ないだろう」と思うからである。)

## 十二、兄と妹の夫が駆けつける(前)

兄が帰って来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措いても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床についてからは、退屈のため猶更それを読みたがった。母も私も強いては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「……そういう元気なら結構なものだ。よっぽど悪いかと思つて来たら、大変好いようじゃありませんか」と、兄はこんな事を言いながら父と話をした。その賑やか過ぎる調子が私には却つて不調和に聞こえた。それでも父の前を外して私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「……新聞なんか読ましちやいけなかないか」と言うので、「……私もそう思うんだけど、読まないと承知しないんだから、仕様がな」と応えると、兄は私の弁解を黙つて聞いていた。やがて、「……よく解るのかな」と言った。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは余程鈍っているように観察したらしい。「……そりゃ慥です。私はさつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもありませんよ。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であった。父は彼に向かって妹の事をあれこれと尋ねていた。「……身体が身体だからむやみに汽車になんぞ乗



って揺れない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、却ってこっちが心配だから」と言っていた。「……なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支えない」とも言っていた。(本文)

\*

\*

さて、兄が帰って來た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措いても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床についてからは、退屈のため猶更それを読みたがった。母も私も強いては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「……そういう元氣なら結構なものだ。よつほど悪いかと思つて來たら、大変好いようじゃありませんか」と、兄はこんな事を言いながら父と話をした。その賑やか過ぎる調子が私には却つて不調和に聞こえた。(これは、当然の対応であり、ひどそうだねと言う人はいないのである)。それでも父の前を外して私と差し向いになつた時は、むしろ沈んでいた。

「……新聞なんか読ましちやいけなかないか」と言うので、「……私もそう思うんだけど、読まないで承知しないんだから、仕様がな」と応え、兄は私の弁解を黙つて聞いていた。やがて、「……よく解るのかな」と言った。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは余程鈍つているように観察したらしい。「……そりや慥です。私はさつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもありません。あの様子じやことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであつた。

兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であつた。父は彼に向かつて妹の事をあれこれと尋ねていた。「……身体が身体だからむやみに汽車になんぞ乗つて揺れない方が好い。無理をして見舞に來られたりすると、却つてこっちが心配だから」と言つていた。「……なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支えない」とも言つていたとある。(こゝら辺の場面は、このような重い病氣になつた時にはごく一般的に交わされる「患者と見舞客或いは身内」などとの会話であり、それゆゑ、大事なものは、実は「この次の場面」からであり、それは、次のようなものである。

## 十二、最初の電報を受け取る(後)

乃木大将の死んだ時も、父は一番先きに新聞でそれを知つた。「……大変だ大変だ」と言つた。何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。「……あの時はいよいよ頭が変になつたのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私に言つた。「……私も実は驚きました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。

その頃の新聞は實際田舎ものには日毎に待ち受けられるような記事ばかりであつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持つて來て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかつた。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて來て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取つた。洋服を着た人を見ると犬が吠えるような所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受け取つた母は、果して驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。「……何だい」と言つて、私の封を開くのを傍

に立って待っていた。

電報には一寸会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあった。私は首を傾けた。「……きつとお頼もうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私も或はそうかも知れないと思った。しかしそれにしても少し変だとも考えた。とにかく兄や妹の夫まで呼び寄せた私が、父の病気を打遣って、東京へ行く訳には行かなかった。私は母と相談して、行かれないという返電を打つ事にした。出来るだけ簡略な言葉で父の病気の危篤に陥りつつある旨も付け加えたが、それでも気が済まなかったから、委細手紙として、細かい事情をその日のうちに認ためて郵便で出した。頼んだ位地の事とはかり信じ切った母は、「……本当に間の悪い時は仕方ないものだね」と言っただけで残念そうな顔をした。(本文)

\*

\*

さて、大事なのは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年(一九一二年)の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経った「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」(先生と遺書)の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書斎に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父は一番先きに新聞でそれを知った。そして、『大変だ大変だ』と言って、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりであった。私は父の枕元に坐って鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかった」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によっていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたいに来られるかという意味が簡単に書いてあった」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かれない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことよって、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたいに来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろし

い)、話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたいのが来られるかという」内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会って、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会って、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打って来るからである。

### 十三、二度目の電報が来る(前)

私の書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とか言ってくるだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。「……大方手紙で何とか言って来て下さるつもりだろうよ」と言った。母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私も或はそうかとも考えたが、先生の平生から推してみると、どうも変に思われた。「……先生が口を探してくる」、これはあり得べからざる事のように私には見えた。「……とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この電報はその前に出したものに違いないですね」と、私は母に向かってこんな分り切った事を言った。

母はまた尤もらしく思案しながら「……そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打ったという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているに……。その日は丁度主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合いの上、病人に浣腸などをして帰って行った。

父は医者から安臥を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらっていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌ったが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従って、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人は却って平気でいたりした。尤も尿の量は病気の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがっても、舌が欲しがらただけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い鞆に納められたままであった。(本文)

\*

\*

さて、私の書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とか言

って来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で届いた。それには「……来ないでもよろしい」という文句だけしかなかったとある。

まず、先生から「……ちよつと会いたいのが来られるかという」電報（急報）を受ける。この時の先生は、「私」という人に直接会って、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたのである。それゆえ、この時、「私」という人が、直ぐにも東京へと行き、そして、先生に会って直接話を聞いていたら、（少なくとも）この時期での「先生の自殺」ということは回避されたかも知れない。ところが、「私」という人は、父親の病状が重篤であるので、（東京には）「……行かれない」という電報（急報）を先生へと打つ。先生は、その電報（急報）を受けて、失望し、その後、二日間、あれこれ考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手（私）に会って、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」（つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変化してしまうのである。それが、まさに「……来ないでもよろしい」という電報（急報）の「意味合い」になるのである。

ところで、私の母親という人は、この「電報」（急報）を条件のいい「就職口」のことだろうと思ひ込んでいて、それゆえ、それを母親に見せると、「……大方手紙で何とか言つて来て下さるつもりだろうよ」と言った。母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私も或はそうかとも考えたが、先生の平生から推してみると、どうも変に思われた。「……先生が口を探してくれる」、これはあり得べからざる事のように私には見えた。「……とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、（だとすれば二日間では葉書や手紙などは届かない距離であり）、この電報はその前に出したものに違いないですね」と、私は母に向つてこんな分り切った事を言った。母はまた尤もらしく思案しながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打つたという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。その日は丁度主治医が町から院長を連れて来るはずになつていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者 は立ち合ひの上、病人に浣腸などをして帰って行つた。

父は医者から安臥を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらつていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌つたが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従つて、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人は却つて平気でいたりした。尤も尿の量は病気の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがらただけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い鞆に納められたままであつたとある。（父親の病状は、まさにここまで悪化したということである。）

### 十三、作さんという人が見舞いに来る（後）

子供の時分から仲の好かつた作さんという今では一里ばかり隔たつた所に住んでいる人

が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」と言つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。父は、「……作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」と言うのと、「……そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるし、子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」と言うのであつた。

浣腸をしたのは作さんが來てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭で大變樂になつたと言つて喜んだ。少し自分の壽命に対する度胸が出來たという風に機嫌が直つた。傍にいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報の來た事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。「……そりや結構です」と妹の夫も言った。「……何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つた。(本文)

さて、子供の時分から仲の好かつた作さんという今では一里ばかり隔たつた所に住んでいる人が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」と言つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。父は、「……作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」と言つと、「……そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるし、子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」と言うのであつた。(この二人は、まさに「幼なじみ」の親友であり、それゆえ、お互いの「氣心」はよく知れているかと思うが、それゆえ、いわば「氣さくに」話が出てくるのかも知れない。)

浣腸をしたのは作さんが來てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭で大變樂になつたと言つて喜んだ。少し自分の壽命に対する度胸が出來たという風に機嫌が直つた。傍にいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報の來た事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。(これは、夫を何とか元氣づけようとする妻の必死の愛情の表れなのかも知れない)。傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。「……そりや結構です」と妹の夫も言った。「……何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つたとある。(これは、病氣の父親が喜んでくれるのであれば、それは、それで(うそでも)よいのかも知れないということである。)

\*

\*

十四、最後の一撃を待つ間際<sup>まぎわ</sup>まで（前）

十四、最後の 一撃を待つ間際まで（前）

父の病気は最後の 一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するようにみえた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入った。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寝入つていた。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。「……関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」と、関というのはその人の苗字であつた。「……しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」と言つと、「……困つても仕方がない。外の事と違ふからな」と言うのであつた。（本文）

さて、父の病気は最後の 一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するように見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入つたとある。（これは、終にその時を待つばかりの段階へと入つたということである。）

父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつた。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寝入つていた。（これは、實際誰にもよくある事ではないかと思ふ）。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。「……関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」と、関というのはその人の苗字であつた。「……しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」と言つと、「……困つても仕方がない。外の事と違ふからな」と言うのであつた。（やがて兄弟二人の關係が語られていくのである。）

十四、兄と床を並べて寝る私（後）

兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は

子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚<sup>はば</sup>かった。そうしてお互にお互がどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。「……お父さんは、まだ治る気であるようだな」と兄が私に言った。

実際兄の言う通りに見えるところでもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと言って承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかったのを残念がった。その代り自分の病気が治ったらというような事も時々付け加えた。

「……お前の卒業祝いは已<sup>や</sup>めになって結構だ。おれの時には弱ったからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽<sup>あお</sup>られたその時の乱雑な有様を想い出して苦笑した。飲むものや食うものを強<sup>し</sup>いて廻<sup>まわ</sup>る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。

私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちは好く喧嘩<sup>けんか</sup>をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這<sup>はい</sup>入ってからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺<sup>なが</sup>めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったので、また懸<sup>た</sup>け隔<sup>だ</sup>たつた遠くいたので、時から言つても距離から言つても、兄はいつでも私には近くなかつたのである。それでも久しぶりにこう落ち合つてみると、兄弟の優<sup>やさ</sup>しい心持がどこからか自然に湧<sup>わ</sup>いて出た。場合が場合なのもその大きな原因<sup>げんいん</sup>になつていた。二人に共通な父、その父の死のうとして枕<sup>まくら</sup>元<sup>もと</sup>で、兄と私は握手したのであった。

「……お前これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違つた質問を兄に掛けた。「……一家<sup>いっか</sup>の財産はどうなつてるんだらう」と言うと、「……おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産<sup>ざいぜん</sup>つて言つたところで金としては高<sup>たか</sup>の知れたものだらう」と言い、母はまた母で先生の返事の来るのを苦しめていた。「……まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。(本文)

\*

\*

さて、兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであつた。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚<sup>はば</sup>かった。そうしてお互にお互がどんな事を思っているかをよく理解し合つていた。「……お父さんは、まだ治る気であるようだな」と兄が私に言った。実際兄の言う通りに見えるところでもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと言って承知しなかつた。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかつたのを残念がった。その代り自分の病気が治つたらというような事も時々付け加えたのである。(これは、最後の最後の最後まで、「……自分が何年何月何日の何時頃<sup>なんじ</sup>に死ぬのかは？」本人ですらも極めて分かり難<sup>がた</sup>いことになるのである。)

また、「……お前の卒業祝いは已<sup>や</sup>めになって結構だ。おれの時には弱つたからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコール(酒)に煽<sup>あお</sup>られたその時の乱雑な有様(いわば「狂乱の宴会<sup>けいれん</sup>)」を想<sup>おも</sup>い出して苦笑した。飲むものや食うものを強<sup>し</sup>いて廻<sup>まわ</sup>る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。(このような「過去の記憶」があるからこそ、「私」という人は、いわゆる「卒業祝い」というものを殊更<sup>ことさら</sup>に嫌う大きな要因の一つになつていようだろう。いわば「トラウマ」に近いものになつているのかも知れない。)

ところで、私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちは好く喧嘩<sup>けんか</sup>をして、



年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入<sup>はい</sup>つてからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったのも、また懸<sup>く</sup>け隔<sup>た</sup>たつた遠くにいたので、時から言っても距離から言っても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合<sup>あ</sup>ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因<sup>げんいん</sup>になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕<sup>まくらもと</sup>元<sup>もと</sup>で、兄と私は握手したのであったとある。(此所<sup>ここ</sup>には、兄弟二人の子供の頃からの関係が簡単に語られていると共に、先生が言っていた「財産の問題」も遂に「私」という人の口を突いて出て来ているのである。)

それは、本文では、「……お前<sup>まへ</sup>これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違<sup>ちが</sup>った質問を兄に掛けた。「……一家<sup>いっか</sup>の財産はどうなってるんだろう」と言うと、「……おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産<sup>ざいぜん</sup>って言ったところで金としては高<sup>たか</sup>の知れたものだろう」と言い、そして、母はまた母で先生の返事の来るのを苦<sup>くる</sup>にしている、「……まだ手紙は来ないかい」と私を責めるのであった。

## 十五、先生先生とは一体誰<sup>だれ</sup>の事<sup>こと</sup>だい (前)

「……先生先生というのはい体誰<sup>だれ</sup>の事<sup>こと</sup>だい」と兄が聞いた。「……こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明<sup>せつめい</sup>を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。「……聞いた事は聞いたけれども」と、兄は必<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>聞いても解<sup>わか</sup>らないと言<sup>い</sup>うのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解<sup>りかい</sup>してもら<sup>もら</sup>う必要<sup>ひつ</sup>はな<sup>な</sup>かった。けれども腹は立<sup>た</sup>った。また例の兄らしい所<sup>ところ</sup>が出てきたと思<sup>おも</sup>った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考<sup>かん</sup>えていた。少なくとも大学の教授<sup>けう</sup>ぐらいだろうと推察<sup>すいさつ</sup>していた。名<sup>な</sup>もない人、何<sup>なに</sup>もして<sup>して</sup>いない人、それがどこに価値<sup>かち</sup>をもっているだろう。兄の腹はこの点<sup>てん</sup>において、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊<sup>あそ</sup>んでいるのだと速断<sup>すみだん</sup>するのに引きかえて、兄は何<sup>なに</sup>かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰<sup>つま</sup>らん人間<sup>じんがう</sup>に限<sup>かぎ</sup>ると言<sup>い</sup>った風の口<sup>くち</sup>吻<sup>ぶん</sup>を洩<sup>も</sup>らした。「……イゴイストはいけないね。何<sup>なに</sup>もしないで生きていようというの<sup>の</sup>は横<sup>よこ</sup>着<sup>ぎ</sup>な<sup>な</sup>了<sup>り</sup>簡<sup>かん</sup>だからね。人は自分<sup>おのれ</sup>のもっている才能<sup>たのう</sup>を出<sup>だ</sup>来<sup>き</sup>るだけ働<sup>はたら</sup>かせなくつちや嘘<sup>うそ</sup>だ」と言<sup>い</sup>う。私は兄に向<sup>むか</sup>かって、自分<sup>おのれ</sup>の使<sup>つか</sup>っているイゴイストという言葉<sup>ことば</sup>の意味<sup>いみ</sup>がよく解<sup>わか</sup>るか<sup>か</sup>と聞き返<sup>かえ</sup>してやりた<sup>た</sup>かった。「……それでもその人<sup>ひと</sup>のお蔭<sup>かげ</sup>で地位<sup>ちゐ</sup>が出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ればまあ結構<sup>けつこう</sup>だ。お父<sup>とう</sup>さんも喜<sup>よろこ</sup>んでるようじゃないか」と言<sup>い</sup>った。(本文)

\*

\*

さて、「……先生先生というのはい体誰<sup>だれ</sup>の事<sup>こと</sup>だい」と兄が聞いた。「……こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問<sup>しつもん</sup>をしておきながら、すぐ他の説明<sup>せつめい</sup>を忘れてしまう兄<sup>あに</sup>に対して不快<sup>ふくたい</sup>の念<sup>ねん</sup>を起<sup>おこ</sup>した。「……聞いた事は聞<sup>き</sup>いたけれども」と、兄<sup>あに</sup>は必<sup>ひつ</sup>竟<sup>きやう</sup>聞<sup>き</sup>いても解<sup>わか</sup>らないと言<sup>い</sup>うのであ<sup>あ</sup>った。私<sup>わたし</sup>から見<sup>み</sup>ればなにも無理<sup>むり</sup>に先生<sup>せんせい</sup>を兄<sup>あに</sup>に理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>してもら<sup>もら</sup>う必要<sup>ひつ</sup>はな<sup>な</sup>かつた。けれども腹<sup>はら</sup>は立<sup>た</sup>った。また例<sup>れい</sup>の兄<sup>あに</sup>らしい所<sup>ところ</sup>が出<sup>で</sup>てきたと思<sup>おも</sup>った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名<sup>しやうめい</sup>の士<sup>し</sup>でなくてはならないように兄<sup>あに</sup>は考<sup>かん</sup>えていた。少なくとも大学の教授<sup>けう</sup>ぐらいだろうと推察<sup>すいさつ</sup>していた。(この「先生<sup>せんせい</sup>」という言<sup>い</sup>

葉については、何度も説明して来ているので、ここでは省略したいと思う。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰らん人間に限ると言った風の口吻を洩らした。「……イゴ（エゴ）イストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着な了簡だからね。人は自分のもっている才能を出来るだけ働かせなくっちゃ嘘だ」と言う。私は兄に向かって、自分の使っているイゴ（エゴ）イストという言葉の意味がよく解るかと言き返してやりたかったとあるが、兄は、恐らく、イゴ（エゴ）イストを「横着やわがまま或いは身勝手ぐらい」に考えているのだろう。

ちなみに、「検索」で引いてみると、それは「利己主義者」（自己の利益を重視し、他者の利益を軽視、無視する考え方の人であり、それにより、他者が不利益や損害を被ることも少なくない）とある。

## 十五、父の死後、母親を誰が見るのか（後）

「……それでもその人のお蔭で地位が出来ればまあ結構だ。お父さんも喜んでるようじゃないか」と、（兄は）後からこんな事を言った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事も出来ず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまった今となって見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなった。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいがと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちっとも頓着していない事に、神経を悩まさなければならなかった。

さて、父が変な黄色いものも嘔いた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「……ああして長く寝ているんだから胃も悪くなる筈だね」と言った母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「……聞いたか」と言った。それは医者が帰り際に兄に向かって言った事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。「……お前ここへ帰って来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかった。

「……お母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄がまた言った。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行っても惜しくないように見ていた。「……本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだろう」と言うので、「……兄さんが帰って来るのが順ですね」と私が言った。「……おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。「……お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」と言うので、「……お母さんがここを動かか動かないかがすでに大きな疑問ですよ」と私は言った。兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合った。（本文）

\*

\*

さて、「……それでもその人のお蔭で地位が出来ればまあ結構だ。お父さんも喜んでようじゃないか」と、(兄は)後からこんな事を言った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事も出来ず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまつた今となつて見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなつた。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考へているような衣食の口の事が書いてあればいいかと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちつとも頓着していかない事に、神経を悩まさなければならなかつた。

これは、世間一般的に考えれば、例えば、どのような大学を卒業し、どのような職業に就き、そして、どのくらいの収入を得て、どれくらいの社会的地位についているのか、また、どのくらい社会的に認められている存在であるのか、いわばその人の「社会的な評価」になつているかと思う。一方、先生の場合は、大学は、東京帝国大学を卒業しているが、それ以外は、社会的な活動は全くしていない存在であり、そのような存在に、一体、どのような「価値」があるのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、前者の「学歴、職歴、所得、社会的地位、知名度、生活ぶり、その他」などは、いわば俗人の「世俗的評価」に過ぎず、それは、人間として真に優れているかどうかとは全く違うものになるのである。一方、先生は、人間として真に「内的(成長)成熟」しているということであり、それは、例えば、孔子をはじめ、ソクラテス、釈迦、イエス、その他、実に様々な人物がいるかと思うが、そのように人間として真に「内的(成長)成熟」を遂げている人たちであれば、いわゆる「……人生の何たるかを教えてくれる存在」でもあり、そのような「存在」こそは、まさに「先生」と呼ぶにふさわしいということである。

さて、父が変な黄色いものも嘔吐した時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「……ああして長く寝ているんだから胃も悪くなる筈だね」と言つた母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合つた時、兄は「……聞いたか」と言つた。それは医者が帰り際に兄に向つて言つた事を聞いたかという意味であつた。私には説明を待たないでもその意味がよく解つていた。「……お前こへ帰つて来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかつた。

「……お母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄がまた言つた。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行つても惜しくないように見ていた。「……本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだらう」と言うので、「……兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私が言つた。「……おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。「……お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」と言うので、「……お母さんの死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合つた。

例えば、父親の死後、葬儀を無事に終えて、やがて「財産分与」が始まることになるが、その場合、家や土地或いは現金その他などをどのように分配するのか、先生が心配していたようなことが起こり得るのかどうか、また、兄も私も妹も母親の面倒を見ないとすると、

当面は、「……まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんは（最終的には）どっちかで引き取らなくっちゃなるまい」となるのである。

## 十六、父は時々囁語を言うようになった（前）

父は時々囁語を言うようになった。「……乃木大将に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」と、こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「御光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起って母を呼びに行つた。「……何かご用ですか」と、母が仕掛た用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何も言わない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「……御光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前につきつと涙ぐんだ。そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。「……あんな憐れっぽい事をお言いだがね、あれでもとは随分酷かつたんだよ」と言うのであつた。

母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、何時もとはまるで違つた気分で、母の言葉を父の記念のように耳へ受け入れた。

父は自分の目の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。「……今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「……そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のためには好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。「……言いたい事があるのに、言わないで死ぬのも残念だろうし、と言って、こつちから催促するのも悪いかも知れず」と、話はどうとう愚図愚図になつてしまつた。そのうちに昏睡が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思ひ違えて却つて喜んだ。「……まあまあして楽に寝られれば、傍にいるものも助かります」と言つた。（本文）

\*

\*

さて、父は時々囁語を言うようになった。「……乃木大将に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」と、こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「御光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起つて母を呼びに行つた。「……何かご用ですか」と、母が仕掛た用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何も言わない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「……御光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前につきつと涙ぐんだ。（これは、夫婦だけの《子供達には知りようもない》実に膨大の「過去の記憶」があり、その実に膨大な過去の様々な喜怒哀楽の記憶の中の幾つかがふと甦つて来るのである）。そうだからこそ、そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。「……あんな憐

れつばい事をお言いだがね、あれでもとは随分酷かったんだよ」と言うのであった。母は父のために箆で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、何時もとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念のように耳へ受け入れた。父は自分の目の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。「……今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「……そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。「……言いたい事があるのに、言わないで死ぬのも残念だろうし、と言って、こつちから催促するのも悪いかも知れず」と、話はどうとう愚図愚図になつてしまつたとある。

例えば、まさに死の間際に、「……お父さん、何か言つておくことある？」などと聞かれて、たとえ「……何々」と応えたとしても、それは、もう意識や精神の混濁している状態からの言葉になり、どこまで本人の意思かは厳密には判別しがたくなる。それゆえ、本来であれば、頭や精神などがまだ健全に働いているうちに、例えば、弁護士など同席の上の「遺言書」などを（動画と共に）残して置けば、より確かな本人の意思表示になるのかも知れない。たとえそうしたとしても、むろん、骨肉の「相続争い」というものは、起きる時には起きてしまうものであり、それだけ「財産」（或いは「お金」）へのわれわれ人間の執着というものは、まさに「凄まじいもの」があるということである。

そのうちに昏睡が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思ひ違えて却つて喜んだ。（これは、昏睡状態という、いわば専門的《医学的》知識などから冷静に見ているむしろ冷たい目であり、《つまり知識のある人が知識のない人を見て軽蔑するようなものであるが》、一方、母親は、たとえ専門的《医学的》知識などはないとしても、苦しまずにやすやすと眠っている夫の姿を見て、素直に喜んでいるのであり、そういう温かな眼差しであり、「……まあああして楽に寝られれば、傍にいるもの（自分をも含めて）助かります（気が楽になります）」と言っているのである。

#### 十六、先生から分厚い郵便物が届く（後）

父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻までそこに坐つていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するように見えた。母が昏睡状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかつた。

そのうち舌が段々纏れて来た。何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあつた。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われない程、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかつた。「……頭を冷やすと好い心持ですか」と聞くと、「うん」と答えるのであつた。

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更えて、それから新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切つた氷の破片が、囊の中で落ちつく間、私は父の禿上つた額の外でそれを柔らかに抑えていた。その時兄が廊下伝いに這入つて来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取つ

た私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだ。(本文)

\*

\*

さて、父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻までそこに坐っていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するように見えた。母が昏睡状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。(精神が混濁を始める。)

そのうち舌が段々纏れて来た。何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあった。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われない程、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかった。「……頭を冷やすと好い心持ですか」と聞くと、「うん」と答えるのであった。(舌の動きが悪くなり呂律が回らなくなり、意味も不明瞭になって来た。)

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更えて、それから新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切った氷の破片が、囊の中で落ちつく間、私は父の禿上った額の外でそれを柔らかに抑えていた。(これは、子供の頃、熱が出た時などには、よく枕に氷の入った水枕と額の上に氷を入れた氷嚢などを載せると、その冷たさが非常に心地よかつたという経験を持つ人も非常に多いのではないかと思う。)

その時兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

さて、この尋常ではない「分厚い郵便物」こそは、いわば「先生の遺書」であり、第三部(下)の『先生と遺書』の、まさに「全文の原稿」になっているのである。)

## 十七、父親は危険な状態へと陥る(前)

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が廁へ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は、「……どこへ行く」と番兵のような口調で誰何した。「……どうも様子が少し変だからなるべく傍にいるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。

私もそう思っていた。懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯いた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。「……どうも色々お世話になります」と、父はこう言った。

そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てた。(本文)

\*

\*

さて、その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が厠へ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は、「……どこへ行く」と番兵のような口調で誰何した。「……どうも様子が少し変だからなるべく傍にるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。私もそう思っていた。懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。

父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯した。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。「……どうも色々お世話になります」と、父はこう言った。(これは、病人の最期を看取るために、親戚などがみな枕元に集まっている状態なのか知れない)。そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人(たち)は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てたとある。(この「特別の時間を偷んで」というのは、いわば看護の合間合間の「空いた時間を偷んで《利用して》」、「私」という人は、自分の室へ来て、その誰もいない自分の室で、まさにその「分厚い郵便物」を読んだという事になるのだろう。)

#### 十七、手紙の冒頭部分を読むと(後)

私は繊維の強い包み紙を引き掻くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた原稿様のものであった。そうして封じる便宜のために、四つ折りに畳まれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。私の心はこの多量の紙と印気が、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極まっているという予覚があった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んだ。その頁は下のように綴られていた。

「……あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として

教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とあった。

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執ることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろうか。先生はなぜ私の上京するまで待つていられないのだろうか。「……自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」とある。

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後を読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を駆け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。(本文)

\*

\*

さて、私は繊維の強い包み紙を引き掻くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた「原稿様」のものであった。そうして封じる便宜のために、四つ折りに畳まれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。……

私の心はこの多量の紙と印気が、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極まっているという予覚があった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んだ。その頁は下のように綴られていた。(それは、第三部の『先生と遺書』へと連なる内容になるものである。)

「……あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。(ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が(妻を)勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行っているその間のこと」であり、その「間」に、「……この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。)

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執ることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろうか。先生はなぜ私の上京するまで待つていられないのだろうか。「……自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」とは、一体、どういうことなのだろうか?



私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。(それは何かいやな予感が突然襲って来たのである)。私はつづいて後を読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声がか聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を駆け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟したが、(実は兄に代って、浣腸のため油紙を父の尻の下に宛てがう手助けで呼ばれたのであった。)

十八、この手紙があなたの手に落ちる頃には(前)

病室には何時の間にか医者が出て来た。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸を試みるころであった。看護婦は昨夜の疲れを休める為に別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔を見ると、「……ちよつと手をお貸し」と言つたまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐つていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来ると言つて、帰って行った。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも呼んでくれるようにわざわざ断つていた。

私は今にも変がありそうな病室を退ぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛くした気分になれなかった。机の前に坐るや否や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれば、それが最後だという畏怖が私の手を顫わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰つて行った。私の眼は几帳面に枠の中に篋められた字画を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束なかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳んで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼に這入った。

「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあつた。

私ははつと思つた。今までわざわざと動いていた私の胸が一度に凝結したように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句位ずつの割で倒に読んで行つた。私は咄嗟の間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自然たそうに畳んだ。(本文)

\*

\*

さて、病室には何時の間にか医者が出て来た。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸を試みるころであつた。看護婦は昨夜の疲れを休める為に別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔を見ると、「……ちよつと手をお貸し」と言つたまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。(つまり「浣腸の為の準備をする手助けとして呼ばれた」のであつた。)

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐つていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来ると言つて、帰って行った。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも

呼んでくれるようにわざわざ断っていた。(つまり「その瞬間がいつ来るのかは誰にもまた本人ですら分からない」ということである。)

私は今にも変がありそうな病室を退ぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛くりした気分になれなかった。机の前に坐るや否や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれば、それが最後だという畏怖が私の手を顫わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰って行った。私の眼は几帳面に枠の中に箝められた字画を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束なかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳んで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼に這入った。

「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあった。(これは、実に「衝撃的な言葉」であり、というのも、先生には、これという「健康上の問題」もなく、また、自殺を決行しなければならぬほどの「精神上の問題」も全く感じられなかったからである。)

私ははつと思つた。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句位ずつの割で倒に読んで行った。私は咄嗟の間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであった。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であった。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自烈たそうに畳んだ。(例えば、東日本大震災の大津波の後、自分の「家族や親戚或いは知人や親友その他」などの「安否」を一刻も早く知ろうとしても、なかなかその「安否の確認」が想うように出来ず、もうイライラ自烈たく感じているような心理に近いのも知れない。)

#### 十八、慌てて三等列車に乗り込む(後)

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕辺は存外静かであった。頼りなさそうに疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招きして、「……どうですか様子は」と聞いた。母は「……今少し持ち合つてるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「……どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯した。父ははつきり「……有難う」と言った。父の精神は存外朦朧としていなかった。

私はまた病室を退ぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立つて帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ駆け込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つたろうか、そのところを判然聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎留守であった。私には凝として彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。心の落ち付きもなかった。私はすぐ俵を停車場へ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片を宛てがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅へ届けるように車夫に頼んだ。そうして思い切つた勢で東京行き汽車に飛び乗

ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、漸ようやく始めから仕舞まで眼を通した。(第一部・完)

\*

\*

さて、私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕辺まくらべは存外ぞんがい静かであった。頼りなきように疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招てまねぎして、「……どうですか様子は」と聞いた。母は「……今少し持ち合っているようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「……どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯うなずいた。父ははつきり「……有難う」と言った。父の精神は存外ぞんがい朦朧もろうとしていなかった。(それゆえ、何日かは保つかも知れないと思い、次のような行動に出たのかも知れない。)

私はまた病室を退しりぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。(まだ間に合うので)、私は突然立って帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つだろうか、そのところ(あと何日保つか)を判然はつきり聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎あいにく留守であった。私には凝じつとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。(それは「汽車の発車時間があるからであり」、心の落ち付きもなかった。私はすぐ俵くろまを停車場ステーションへ急がせた。)

私は停車場の壁へ紙片かみざれを宛あてがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅うちへ届けるように車夫しやふに頼んだ。(突然、黙つていなくなれば、後々大きな問題にもなり兼ねないからである)。そうして思い切った勢いきおいで東京行きとうきょうの汽車に飛び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、漸ようやく始めから仕舞まで眼を通した。(これは、結局、先生の安否やすひが気になって気になって、どうにも自分を止めようがなかったということである。)(第二部「両親と私」完)

\*

\*

中 両親と私（概略）

さて、今度の「両親と私」という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（半襟や鞆）などと「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになってい

まず、その冒頭は、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった」。父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよっとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「卒業が出来てまあ結構だ」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」（本当の「意味合い」）は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういいう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せっかく丹精した息子が、自分のいなくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

そこで、私は、父や母に「卒業証書」を大事そうに見せると、父は、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置き、一方、私は、母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。（しかし、この病気は、むしろ、そういうものではなかったのである）。しかも、両親は、私のために赤い飯を炊いて客を呼ぶという相談までしているのである。母親も、「……仰山仰山とお言いたが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言い、父親も、「……呼ばなくたって嬉しいが、呼ばないとまた何とか言うから」、「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と言う。仕方なく、私は父と相談の上、招待の「日取り」を決めるのであった。

ところが、その「日取り」のまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であり、それは新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡り、結局、「……まあ、（祝いは）ご遠慮申した方がよからう」ということになるのである。やがて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元気は、急速に衰えて行くのであった。（ちなみに、この「天子様がお隠れになる」という言葉は、太宰治の『思ひ出』という作品の冒頭にも出て来るものであり、それは、叔母が「……天子様がお隠れになったと言いなさい」と、幼い太宰治に言う場面である）。それはともかく、——母親は、父親を安心させるためにも、「……

：お前の先生先生という方にでも（就職先を）お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に手紙を書くが、いつまで経っても返事は来ない。それは、一体、なぜかと問えば、まず、なぜここに明治天皇の「崩御」という話題が登場するのかと言えば、それは、まさに先生の「自殺」の一つの大きな「切っ掛け」となるものであり、そのための「伏線」になっているとともに、先生は、この時、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、「私」という人は、九月になると、また東京へ出ようとしたが、父はまた私を引き留めたとある。「……お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言い、私は出来るだけ父を慰めたとある。これは、（死を間近にしている）父親のこの「心細さ」や「淋しさ」というものには、恐らく、計り知れない程のものがあるに違いない。つまり、誰もがやがては（人生の最期には）いやでも味わうことになる「思いや感情」になるのだろう。——ところが、私がいよいよ立とうという間際になって、（たしか二日前の夕方であったが）、父は（風呂場で）突然引つ繰り返ったのである。そこで、東京行きは、もう少し様子を見てからということになり、しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事態となり、そこで兄に父の現状を知らせる長い手紙を出し、また、妹には母が同じような内容の手紙を書いて出すことになる。また、母と相談して、父の枕元へは、町の病院から看護婦を一人頼む事にし、しかも、病人がいるので、自然と家への見舞の出入りも多くなつたとある。

さて、父の病状は、面白くない方へ移っていくばかりで、ついに私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打ち、兄からはすぐ行くという返事が来、一方、妹の方は、流産を恐れて、妹の夫が来ることになるのである。もちろん、こちら辺の内容は、それほど重要なものはそれほどはなく、いわば世間一般で「よく交わされる会話」の内容になっているかと思うが、それゆえ、何よりも大事な場面は、むしろその次の「場面」からなのである。それは、次のようなものである。——まず、「兄」と「妹の夫」がやって来て、父の病状を見ると、「兄」は、新聞紙を読んでいる父親を見て、「……よつほど悪いかと思つて来たら、大変好いようじゃないか」と言い、一方、「妹の夫」も、「……さつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもなく。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

\*

\*

さて、大事なものは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年（一九一二年）の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経つた「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」（先生と遺書）の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書齋に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。そして、『大変だ大変だ』と言つて、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む

時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかった」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によっていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたい」が来られるかという意味が簡単に書いてあった」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かれない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことによつて、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたい」が来られるかという「電報」を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろしい)、話ししましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたい」が来られるかという「内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会つて、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会つて、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来るからである。

\*

\*

やがて、「……父の病気は最後の二撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するのうに見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入った。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。(中略)、そして、私と兄は、一緒に蚊帳の中に寝て、妹の夫だけは、客扱いを受けて、独り離れた座敷に入つて休んだ」とある。——一人は、それほど仲の好い兄弟ではなかったとある。小さいうちはよく喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入つて

からの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。私は長く兄に会わなかったのも、兄はいつでも私には近くなかった。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、兄と私は握手したのであった。「…お前これからどうする」と兄は聞いた。一方、私は、「…：…一家の財産はどうなってるんだろう」と聞いた。すると、兄は、「…：…おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産って言ったところで金としては高の知れたものだろう」となるが、これらの一連の内容を見ると、先生が心配したような「財産」をめぐる「骨肉の争い」は、この「家族」の場合には、起こりそうもないという感じを受けるが、それとも、先生が言うように、「…：…いざという間際で、最後の最後で、悪人になる人が出て来るのだろうか」、それらのことについては、「作者」（夏目漱石）は、何も書いてはいないのである。

さて、父親の病状は、変な黄色いものも嘔いたり、時々嚙語を言ったり、そのうち舌が段々縫れて来て、何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあったとある。そして、父の水枕を取り更て、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せている、その時、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

そして、父親のいる病室から自分の室へ戻ってから、私は早速郵便物の中を開けて見ると、中から出たものは、いわば「原稿」のようなものであるが、その分量があまりに多過ぎて、一気に読み通す訳には行かず、また、同時に病室の事が気にかかっていたので、落ちついて読む気にもなれず、私はそわそわしながらただ最初の二頁を読んでみた。その冒頭の文章は、「…：…あなたから過去を問いたされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従って、それを利用してできる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。（ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が（妻を）勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行っているその間のこと」であり、その「間」に、「…：…この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。）

さて、一度、父親の流腸の手助けに病室に呼ばれ、また、自分の室へ戻っては、長い手紙を拾い読みする余裕すらなく、ただ最初から最後までその頁を順に開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一句が私の眼に入り、それは、「…：…この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というものであり、この瞬間、今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したような感じ



になり、ただ「先生の安否だけが気になった」とある、その結果、私は夢中で医者の家へ馳  
け込み、父はあと何日保つのか聞こうとしたが、医者は生憎留守であり、私はすぐ俵を  
停車場へ急がせた。その停車場で紙切れに母や兄あての簡単な手紙を書き、それを急いで宅  
へ届けるように車夫に頼んだ。そして、思い切った勢いで東京行きたもの汽車に飛び乗ってし  
まった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂から先生の手紙を出して、漸く始め  
からしまいまで眼を通したのであった。(中・完)

\*

\*

「参考文献」

※底本「こころ」夏目漱石（「青空文庫」）